

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第511号 2024年10月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

「理解する」ということは

「理解する」ということは

研究授業でお世話になった時の吉永先生の言葉です。五年教材「言葉の意味が分かること」の授業実践を通してのこの言葉は、「ことば」の世界を超えて、心に響きました。

「コップ」という言葉を理解しようとした時、様々な容器のどれを「コップ」と呼ぶのか、「グラス」「ジョッキ」「湯呑」…ほかにどのような言葉を知っているのか、「コップ取ってくれませんか」と頼まれた時の「コップ」はどのようなものだったか等々、これまでの経験や知識、思考等をもとに、まさしく「個性的」に理解します。

「個性的」

藤原 正伸

日本語ではスープを「飲む」に対し、英語では「eat」を使います。

また、国際化に伴って、日本でも「食べるスープ」が売り出されています。言葉は、人々の交流を通して変化していきます。国際的な視点においても、それぞれの国の文化や人々の生きざまを背景に「個性的」に言葉を理解します。このことは「言葉」に止まらず、物事も、人も、社会も、「個性的」に理解していることにつながり、「言葉」を通して、もの見方・考え方が大きく更新され、心が動いた瞬間でした。

吉永先生との出会いは、十二年前。学力向上の取組に積極的に取り組む中で、研究会の講師として、小野市へお越し頂き、「PISA A型読解力とは」の演題でご講演をいただいたのが最初でした。以後、継続的に授業研究の講師などでお世話になり、小野市の子どもたちの未来を拓く上で、大きなご示唆をいただけてまいりました。

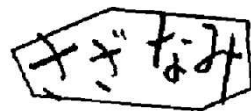
小野市は、兵庫県の神戸市の北西にある人口五万人弱のまちです。東北大学の川島隆太教授の脳科学理論をベースに、「夢と希望の教育」を推進しています。「読み（音読）」「書き」「計算」、「早寝・早起き、朝ご飯とコミュニケーション」が脳を育てる。これらを基軸に進める学力向上の取組は、吉永先生のアドバイスと重なりあって、夢と希望に近づく研究となっております。

○書く活動を大切に（自分の言葉で自分の考えを表現する。考えた証拠を残すノートづくりを大切に）

○「話す・聞く」を軸にした言語活動を大切に（児童が自分の言葉で自分の考えを表現する）

○声を育てる（音読、挨拶、はきはき話す、主体的に詳しく話す）

原点を見つめ、児童とともに未来を拓く学びを楽しんでまいります。益々の「盛会をお祈りします。（兵庫県小野市立小野小学校長）



▼2024年の「全国学力テスト」の結果が公表された。文部科学省の相原康人学力調査室長は「記述式の問題の無解答率は以前より下がっていて、ある程度抵抗感なく問題に取り組んでいるとみられ、深い学びを届ける授業改善が進めば正答率の向上につながるのではなか。小中学校を通して児童や生徒が自分の考えを説明しあう授業を行うなど、思考力・判断力・表現力を育てていく必要がある」とのこと▼新聞情報では、「その他にも、読書の時間が少ない、学校以外での勉強時間が少ない。ゲームを指摘する内容を紹介していた。「思考力・判断力・表現力を育てていく必要がある」との指摘については、目的や話題に沿った内容を記述したり、考えたことをまとめたという力に課題がみられたということであろう。▼具体的には、「目的や意図に応じて、自分の考えが伝わるように、表現方法を工夫して書く力」を目的にして出題は次の通りであった。「学校で1、6年生が2つの班をつくって遊ぶ「たてわり遊び」について、児童の取材のメモを使いながらその良さについて考えたことをまとめる」であった。問題文の内容を含めて出題の条件を丁寧に読めば、適切に答えることができる。「丁寧に文を読む」という力の脆さが誤答につながったのではないかと考えている。（吉永幸司）

Canvaを用いた短歌づくり
高木 富也

東近江市では、夏季休業中に教師・児童ともにCanvaアカウントが整備され、使用が可能となった。Canvaとは、オンラインで使うことができる無料のグラフィックデザインツールであり、現在注目されているアプリである。Canva認定教育アンバサダーである坂本良晶(通称さる先生)は、専門知識やデザインスキルがなくても、直感的にハイセンスなデザイン作業を行うことができること、協働的な学び、個別最適な学びが叫ばれる今日において、コラボレーション機能が豊富なCanvaは、日本の教育シーンを大きく変える可能性を秘めている、ということを書いている。

そこで今回は、坂本氏が著書で提案している「俳句づくり」の実践をベースに、五年生国語科「心の動きを短歌で表そう」(新編新しい国語五 東京書籍)の実践を紹介する。Canvaの「操作方法」ではなく、児童の姿から感じた良い学びの姿を中心に述べていく。まず、従来型の短歌指導の流れをイメージしたい。①テーマを決める ②言葉を集める ③三十一音に整える ④清書をする ⑤余白に挿絵や色塗りなどをする ⑥完成する ⑦掲示し鑑賞するといった流れが一般的ではないだろうか。今回の実践は、①～②まではノーマルに、③～⑦の場面でCanvaを用いた。【言葉とデザインから表現を再構築する姿】

従来型の短歌指導であれば、清書後にその言葉のイメージから絵を描くという一方通行のため、絵を描いた後に短歌を修正するとう姿はあまり見られないう。Canvaを用いれば、言葉を打ち直す、位置を変えらるなど、自由自在に修正ができる。加えて、素材(画像検索)によって無数のデザインから自分が納得いくものを追求することができる。

児童Aは、初めは「夏の雲」とりぼちで「浮かんでる 青い空を スイスイ」と短歌を作った。素材を探している中で、ひまわり畑と青空に雲が一つあるという写真を見つけた、背景に差し込んだ。すると児童Aは、「この写真、びつたりだな。この写真で、夏の「雲」ということは表現できるな。だったら、夏の「空」に変えた方が、自分のイメージと合うな。」と、短歌の表現を修正した。他の児童も、「この表現でいいの、言葉を変える必要があるのか、どんな素材(写真、イラスト、デザイン)があれば自分の表現に近づくのか」と主体的に学び、表現を再構築していく姿が見られた。

Canvaは、目的でなく手段である。しかしながら、教師も児童も、様々な手段が備わっていないと、目的達成に近づくことはできない。児童主体の授業を目指すため、児童が自分の表現ツールの一つの手段としてCanvaも選択肢に入れることができるように、今後も実践していきたい。【参考文献】坂本良晶(2023)「授業・校務が超速に！さる先生のCanvaの教科書基本からAI活用まで！」学陽書房(東近江市立能登川南小学校)

言葉に「気づく」
少徳 信

「ちいちゃんのかげおくり」の学習が始まった。ちいちゃんの様子を読む中で、子どもたちが言葉に「気づく」場面があったので紹介したい。

今回の単元では、本文を通読する前に最終場面(それから何十年：)を読み、その部分だけから何が分かるかについて話し合うことから始めた。その中で、「『前よりもいっぱい家がたっています』から何十年前は家が少なかったんやろう」「なら、昔は公園なんてなかったんじやない?」「なにがあつたんやろ」「これさ、すごくさみしそうに見える。『一人でかげおくり』って、わざわざ一人って書く必要なくない?きつと何かあるから『一人』やねんで」

「ああそうか、それたしかにそうやな。一人って。そうやな」「そうなんやったらさ、『青い空の下』もそうやで。今日も遊んでいますだけでもいいのに、わざわざ青い空って書いてる」「青い空やったらどうなるん?」「なんか、うらやましさがあるんよ。昔は公園じゃなくて、遊べ

へんかったかもしれんから、青い空が逆にうらましい」「うーん。なんとなくわかる」

この一連の会話の中で、子どもたちが気づきを得た瞬間がいくつかあった。初読の段階で、「一人でかげおくり」の「一人」に気づいていた子は何人いただろうか。言われて初めて「一人」の持つ意味や値うちに気づかされた子どもも多かった。また「青い空」も同様に、一直線ではつながらなく「うらやましさ」と結びつけるというある種の衝撃をなんとか自分なりに納得しようとする姿も多く見られた。

今挙げられた言葉は、音読をしていてもなかなか意識のしにくい、読んではいても頭の中で読み飛ばされてしまいがちな言葉である。それらにどんな意味があるのだろう、何が隠されているのだろうと考えながら一語一語に敬意を持って接することが言葉に気づくということだろうと思う。「一人」という言葉に気づいた子の表情が印象的だった。明るく、たくましく本文に向かっていく姿から、気づきが読みのエネルギーになっていくような感覚を得た。一つの言葉を大切にすることの価値を、子どもたちから教わった一時間だった。(彦根市高宮小学校)

音読
弓削 裕之

写真整理をしていると、息子と娘が二人で国語の教科書を読んでいる一枚を見つけた。息子がまだ保育園に通っていた頃、当時小学生だった姉が音読の宿題をしているのを見て、気になってのぞきこんでいる場面だ。色鮮やかな「教科書」と、声に出しているお話の魅力にひきこまれたのだろう。現在、息子は小学二年生で、スイミーの学習をきっかけに絵本を読むようになった。

一年生の教室では、休み時間、担任の前に列ができています。月曜日の音読集会に向けて、古典の暗唱にチャレンジしている風景だ。これまでに暗唱した作品は、「枕草子」と「方丈記」。それ以外にも、算数音読として「10になるかず」を覚えた。

音読プリントには、全学年の音読課題が載っている。自分の学年の課題をクリアしたら、他の学年の課題に取り組む子もいる。「徒然草」をすらすらと音読できる子がいたので驚くと、「幼稚園の頃に覚えました」とのこと。入学前から音読に触れている子もいるようだ。

六年生の課題「円周率」の暗唱に挑戦したAさん。「3.141592...」何度失敗してもあきらめず、休み時間が始まるとすぐに担任のもとへやってきた。そして、見事小数点以下34桁を言い切った。Aさんはガッツポーズ。Aさんと仲の良い子が、「Aさん、こんなに難しい六年生の音読を全

部言わはったんやで」と、別の子に伝えた。音読が「自分ってすごい」「友だちってすごい」につながった。

十月の音読課題は百人一首だ。覚えた札には合格シールを貼り、二十首覚えたら百人一首マスターとなる。Bさんは、課題プリントを配布してから、毎日のように覚えた歌を言いに来た。円周率を覚えたAさんが、「二十首なんて絶対に無理や」と嘆いていたので、Bさんのことを紹介した。すると、AさんはすぐにBさんに話しかけた。そして、「Bさんに覚え方のコツを教えてもらった」とプリントを広げ始めた。それを聞いた別の子も、「Bさん、わたしにも教えて」とお願いしていた。頼られたBさん、とてもうれしそうに「いいよ」と返していた。

「いちねんせいのおうた」(光村一上)の学習で、詩集から好きな詩を一つ選び、動作化をして音読した。自分で考えた動きをつけながら、跳ねるように声を出すCさん。音読が好きなのだなあと感じていた。そのCさんをみんなの前で取り上げてくれたのが、教育実習の先生だった。「くじらぐも」(光村一下)の一斉音読の際、机間支援をしながら先生は、Cさんの伸びやかな声を見つけた。そして、「登場人物の声を変えて音読していった人がいましたよ」と、Cさんを紹介した。普段から大きな声で音読をがんばっていたCさんが、この時クラスの名音読名人になった。

音読が紡ぐ幸せは、これからも続いていきそうだ。
(京都女子大附属小学校)

半年後の学級開き
北島 雅晴

六十六歳無職から、二年生の学級担任をすることになった。十月十五日が勤務初日となる。その前の週に、二十分ほど顔合わせをさせてもらった。私だけでなく、子どもたちも少しだけ緊張している様子だった。

簡単な自己紹介の後「きたじまくんクイズ」で、雰囲気や和らげようとした。きたじまくんとは、現在の私ではなく、二年生のころの私である。これからも、学習の中で登場する人物である。

第2問「きたじまくんは給食の時間どんな様子だったでしょう。」

① もりもり食べておかわりをした。

② ちょっとしか食べられなかった。

③ 好きな物だけ食べていた。

といった問題である。子どもたちの様子を見てみると、落ち着いて話を聞くことができそうだと感じた。(ちなみに正解は②)これらの半年が楽しみになった。

これからの半年に向けて、学級経営案なるものを作ってみた。そういえば、最近は学年経営案・学級経営案は作成しているのだから。教育目標↓子どもにつけた力↓学年目標↓学級目標と筋道立てるのが原則となるが、この半年、自学級でやってみたいことを列挙してみることにした。

① 学習の柱は、日記と読書。

② 「井戸端会議」をやってみよう。
③ 読み語りをつづけよう。
④ 遊び心のある国語のノート作り。

⑤ 歌ではじまり、歌でおわる。
⑥ 「おはなちよう」を成功させる。
⑦ ゆったりと子どもをみよう。
⑧ すばらしさはその場でほめよう。

⑨ 学級通信を週3回発行しよう。
⑩ 保護者にも書いてもらおう。

自分の目標は具体的な方がいい。この中で、②と⑥について、簡単に紹介する。

【②井戸端会議】
正式な名称ではないが、毎日十分から十五分程度、テーマを決めて話し合う時間である。一人一人がみんなの前で気軽に話す場を設定したい。

【⑥おはなちよう】
日記や井戸端会議の話題を見つけるための取材帖を作る。
お：思ったこと
は：はっけんしたこと
な：なぜだろう？
これらにふと気づいた時に、さつと書き留めることができる小型のメモ帳をいつも手元においておくという取り組みである。

まだ実践前なので、実態もなく私の夢を追いかけているようなものだが、後日実践報告をしたい。ただ、「学級開き」は私一人の問題でもあり、今まで半年間培ってきた学級の財産を大切にしたい。
(野洲市立北野小学校)

条件に合わせて書こう
 全校百字作文の取組
 海東 貴利

本校では二年前から校内研究を軸に短作文活動(百字作文)の取り組みを続けている。取組のきっかけとなったのは、それまでの学習に関する調査や日常の授業の様子から、本校児童の国語に関する取り組みや課題を分析したことだ。その結果、全体的な傾向として、目的や意図、条件に合わせて文章を書くことに課題があることが分かった。たとえば、物語文の感想を理由とともに書く学習活動において、最後まで書き上げられず、苦手意識を持っている児童が多いことが見受けられた。

そこで、子どもたちに書く力をつけようと始めたのが「百字作文」である。「百字作文」とは、一年生から六年生までが毎回提示されるテーマに合わせて、百字マスの原稿用紙に作文を書く学習である。毎月二回、一校時が始まるまでの十五分間、全校児童が黙々と集中して取り組んでいる。児童が書き終えた作文は、担任が添削やコメントを加え、学級で掲示している。また、「百字作文コンテスト」を開催し、担任以外の教員が選考した児童の作文を校内に掲示したり、給食の時間に放送で読みだりして、他の児童との交流を広めている。

これまでの主なテーマは、「好きな教科」「夏にしたいこと」

「一学期を振り返って楽しかったこと」「もしもドラえもんの道具がもらえたら」など。

「文章名人になるためのポイント」として全学年共通で次の4点を設定している。①まず、自分の考えを書く。次に、その理由を書く。そして、少し詳しく書いたり、自分の考えを補足したりする。②点や丸を打つ。③丁寧に書く。④書いたら読み直す。

【児童が書いた作文の例】
 テーマ(もしもドラえもん)の道具がもらえたら
 「わたしはほしいひみつどうぐは、おもしろいさんかばんです。どうしてかという、おもしろいさんかばんはけがしたひとをたすけてあげたりまもれるからです。ほかにもいろいろたすけたいです。(86字)」
 (一年生)

「私がほしいと思ったドラえもんの道具は暗記パンです。どこでもドアもすてがたいですが暗記パンにしたいと思いました。どうしてかという、暗記パンを使うと勉強するのがかんたんだと思ったからです。(93字)(六年生)

【今後の取組の改善案】

● これまでは、書き慣れることを主な目的として取り組んできた。今後は「何を」「どのように」書くべきか、特に文字数が足りない児童に対して具体的な手立てを考える必要があると考える。具体的な改善案は以下の通り。
 ● 書くことの楽しさを感じる
 ● 書くことが面倒ではなく、むしろ楽しいと感じられるような環境を整える。柔軟にテーマを設定し、子どもたちが書くことに対して興味をもつように促すことが重要である。「友達に伝えたいこと」や「先生に報告したいこと」といった具体的なシチュエーションを設定し、書く目的を明確にして相手意識や目的意識をもたせたい。
 ● 他の条件を考慮する
 文字数の設定や文体、構成、使用する語彙といった他の条件についても再考する。例えば、百字から二百字への拡大や、友達に向けて書くのか先生に向けて書くのかを考えることで、文章の目的に応じた表現力を高める。また、書く際には、内容の順序を考えることも大切である。意図に応じた構成の工夫や段落の使い方を確かめ、読みやすい文章を作る力をつけよう。

● 言葉を選ぶ手間をかける
 書くときに、言葉を選ぶことに手間をかけることも大切である。単に文字数を稼ぐのではなく、適切な語彙を使い、文章を豊かにすることを目指す。

● 評語コメントと相互評価
 書いた後は、評語コメントを通じて児童同士のフィードバックを促す。また、子どもたち同士で評価した内容を付箋に書いて渡すなどして、互いに学び合う機会を作ろう。

これらの取り組みを通じて、子どもたちがより良い文章を書く力を身につけ、書くことへの自信を持てるように支援していきたい。
 (高島市立マキノ東小学校)

編集後記

▼9月例会(五一〇回)の提案は弓削裕之(京都女子大学附属小)さん。

(研究教材「いちねんせい」のうた)光村図書)研究主題は「1年生が言葉に注目するということ」▼課題設定の理由として「言葉による見方考え方を働かせる」について、言葉に着目することをきいて、具体的には、「〇〇」と書いてあるから「口」だと思おう」と考える力を期待する願いが背景にある。提案の主な内容は、「一般的に1年生は「思わずしてしまおう」というエネルギーを持ってしまおう」というエネ案であった▼「授業実践の提案」教師の指示や発問、子供の発言を丁寧に記述や発問、子供の発言をてくるものであった。授業のはじまりは、「いちねんせい」のうたの全文を示し「何という詩でしょう」「どこに題名を書いていますか」であった。子供の反応が鈍いので、詩を初めから読み題名を理解させるといふ意図があった▼授業記録では「題名」をめぐって発言が続く。「大きい文字で書いている」「最初に書いてあるから、題名がない」と何が書いてあるのか分らないという意味の発言もあり素直な発言が続く。また、学習用語「題名」を学ぶ学習活動でもあった▼研究協議においては次のことについて学ぶことができた①子供の発言を生かしながら詩を楽しむ授業改善の筋道の在り方②学習用語についての指導の仕方について③言葉の力を伸ばす指導の開拓等▼巻頭には、藤原正伸先生から玉稿を頂きました。深謝。
 (吉永幸司)